

博物館ができるまで、その後

八 木 令 子

博物館に関してははずぶの素人である私が、「博物館をつくる」という仕事に携わり、いまでも学芸員として勤務している。博物館の形が整うまでに何をし考えたか、そして一見暇そうな博物館学芸員が日頃どんな仕事をしているかを述べる。

現在私の勤務している千葉県立中央博物館は、約2年前、房総の自然誌、歴史、自然と人間のかかわりなどをテーマに開館した。千葉県に自然誌を中心とした博物館を作る計画は20年近く前からあったが、実際に博物館準備室がおかれたのは開館前の6年間である。

このうち前半の3年は「どのような博物館をつくるか」という構想を練ることに費やされた。たとえば博物館の全体的なテーマ、対象とする分野や範囲、展示方法や具体的な展示物、開館後の博物館活動の方針、どのような機能を持った建物を作るかといったことである。一方後半の3年は、テーマにそって考え出された具体的な展示物を求めて東奔西走した。博物館の展示物には、実物標本、実物とほとんど同じに作られたレプリカ、実物を縮小して表現するジオラマや模型、写真や説明のパネル、映像などがある。学芸員の仕事はジオラマや模型、パネルの原図や原稿かき、成果品のチェック、映像のシナリオづくり、撮影の立会いなど多岐にわたる。また標本の採集にいたり、すでに誰かが持っている場合には、借用の交渉や手続きもする。さらに展示解説書の作成や様々な広報活動もある。この間はじめに考えていた構想が不変であれば問題はないのだが、常に揺れ動いている。中央博物館の場合は1年ごとに大幅に職員が増員され、毎年博物館の構想、展示物、展示の仕方などについて良くも悪くも見直し、変更などが行われた。

さて開館後2年。学芸員の仕事は展示、教育普及、調査研究、資料の収集整理という4つの柱から成り立っている。中央博物館の場合は、各学芸員が年に1回は観察会などの教育活動を行うこと（ちなみに私は地形模型を作るという講習会を担当）、約10年に1回特別展を、4-5年に1回規

模の小さい企画展を担当するという方針である。その間自分の専門分野を中心に調査研究や資料収集を行う。しかしこれは中央博物館に50人以上の学芸員がいるからであって、ほとんどの博物館学芸員は、毎年特別展や年何回かの教育普及活動に追われている。私の場合も現実には、見学者の質問や、展示物の点検などにおわれて一日が終わることが多い。

最後に博物館をつくるという仕事をしながら考えていることを述べたい。博物館の展示は元来、動物、植物、化石、岩石、考古遺物など「物」のコレクションを中心に構成されると考えられてきた。いかにいい「物」をもっているか、それらを学問的裏づけに基づいてどう配置するかが重要であった。中央博物館でも専門分野の研究や資料収集をやれば、それがよい展示活動につながるという考え方が基本にある。しかし私のように地理学、なかでも地形学を専攻したものにとってはそう簡単にはいかない。たしかにフィールドという「物」を扱ってはいるが、それを博物館に運んでくるわけにはいかない。地形図や空中写真による作業、現地調査、室内分析から得られたデータは、写真や図表としてパネル展示はできるが、それだけでは魅力的とはいえない。しかしこれからは今まで展示になりにくいと考えられてきた分野について、限りなく多い情報の中から重要なものを選定し、おもしろく、わかりやすく展示する方法を考えていくべきではないかと思う。このことについては、中央博物館設置準備委員であられた貝塚爽平先生（都立大学名誉教授）が、「第四紀学と博物館」ということでかなり以前から考えを述べられている。中央博物館の地学分野でも、空中写真の実体視、地震性海岸段丘や河川争奪など地形学的な意味をもった模型の製作、土壌断面や火山灰標本の展示などを行っている。またひまわり画像受信システムを導入し、日本周辺の雲の動きをみることができる。まだ試行錯誤の段階であるが、未熟な学芸員のささやかな課題としたい。

(29回生)